

平成29年3月10日

第146号

NJ 素流協 News

平成29年3月10日発行・発行所 ノースジャパン素材流通協同組合 〒020-0024 盛岡市菜園1丁目3-6 (農林会館5階)
TEL 019(652)7227 / FAX 019(654)8533 / <http://www.soryukyo.or.jp/index.html>

ノースジャパン素材流通協同組合 林業講演会 「薪ビジネスの今後の展開」を開催

当組合は2月1日、盛岡市において「薪ビジネスの今後の展開」をテーマに林業講演会を開催し、行政機関、林業関係者、NPO法人等の関係者約100名が参加した。

講師には(株)ディーエルディー(長野県伊那市、三ツ井陽一郎社長) バイオエネルギー事業部部長の木平英一氏、(株)東海木材相互市場(愛知県名古屋市中区)代表取締役社長の鈴木和雄氏をお招き



し、先進的な薪ビジネスの取り組みについてご講演いただいたほか、当組合 鈴木理事長が薪・木炭等を巡る現状と今後の展望について講演を行ったので、その概要をご紹介します。

講演1 「薪ストーブ用の薪の製造販売についてー小口一般家庭向けの薪の宅配サービスー」

講師 (株)ディーエルディー
バイオエネルギー事業部 部長
木平 英一 氏

1 薪はなぜ普及しないのか？

(株)ディーエルディーの本社は長野県



講演する木平英一氏

伊那市に、営業所は長野県内のほか仙台、山形、郡山、東京、名古屋、京都等各地にあり、盛岡には代理店がある。従業員は60名、年間薪ストーブ販売施工台数は1000台で業界では大手である。

当社ではデンマーク、アメリカ、ドイツ等海外メーカー製の薪ストーブや薪割機等を取り扱っており、併せて薪の販売を行っている。

入社した10年前、薪を使う人はごく一部であった。どこにでも森林はあり材料は身近にあるし、適正な価格で買う人がいれば伐って搬出できるし、簡単な生産設備で生産が可能で、薪ストーブの普及により需要もある。足りないのは「流通の仕組み」だ！と思いつき、2007年、薪の宅配サービスを始めることとした。

2 薪の宅配サービスの仕組み

薪の宅配サービスの流れは、原木購入↓玉切り↓薪割り↓乾燥↓配達↓代金請求となる。

長野・山梨エリアの原木は、エリア内から購入するカラマツ、アカマツ等の針葉樹間伐材が主体である。森林組

合、NPO法人、個人等が伐採した原木を、当社ストックヤード持ち込み5700円/m(税別)で購入し、樹種、長さ、曲がり等は問わず受け入れている。山元では元玉・二番玉は合板に、末木は薪に、というように仕分けされている。

東北エリア(宮城県、福島県、盛岡)では広葉樹資源が豊富にあることから、広葉樹ミックスの薪を取り扱っている。原木は仙台の当社ストックヤード持ち込みで9000~1万円/m(税別、運賃込み)で購入している。樹種等は問わず、条件が合えば薪としても受け入れており、45cmの乾燥薪では仙台着1万4000円/m程度(原木換算1万9600円/m)で購入している。

原木は4m材が多いが、これをチェーンソーで45cm又は30cmに玉切りし、これを薪割機で割って薪にする。切りたての薪は水分が多いため、乾燥させて初めて燃料となる。

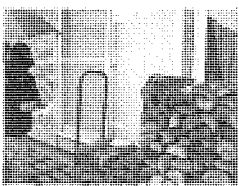
当社の配達の仕事は独特である。通常は、一年分の薪をまとめてトラックで配達するが多いが、当社では専用のラック(容量約0.6m³)を配

達先に設置しており、これには10~2週間分の薪が入る。お客様は必要な分だけ薪を使い、残りが少なくなった頃に減った分を補充する、というシステムである。配達は軽トラックで行う。最近の家では1~2年分の薪をストックできる場所の確保が困難であるが、このラックは幅1.5mと省スペースで設置できる。

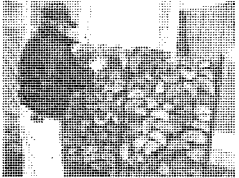
ラックには目盛があり、減った薪の量を計って納品書に記入する。月ごとに納品データをまとめて請求書を発行し、代金は口座振替で自動引き落としされる。水道や電気、ガス等と同じような仕組みである。月々の支払いは家



1週間間隔で巡回



専用のラックを設置



薪ラックを利用した配達の流れ

計に組み込みやすく、年十数万~十数万となる薪代の負担感も軽減される。薪を取りに行くから安くして欲しい、と言われることもあるが、針金で束ねる経費を考えると、配達した方がコストは下がる。

薪の宅配サービスの仕組みをまとめると、次のようになる。

- ① 安定供給↓売り切れがなく、薪の安定供給を当社が保証。
- ② 品質↓乾燥した薪を宅配し、すぐに使える。
- ③ 価格↓一束280円(税別、年間10万円程度)：1000円/ℓの灯油と単

全②再生可能なエネルギーの利用、の二つの意義がある。エネルギーを地産地消することで、地域の資源と労働力がお金になり循環する。障害者福祉施設にも薪生産を委託しているが、施設利用者にとって取り組みやすい作業ということから口コミで広がり、年々取り組む施設が増えている。これらの取り組みが評価され、2014年にはグリーン購入大賞の農林水産大臣賞を受賞した。

- 位発熱量あたりの価格が同じ。
- ④ 利便性↓薪小屋不要で省スペース。
- ⑤ 代金の支払い↓月々の使用料を口座振替で支払い。

薪の宅配は、燃料として灯油等に対抗しようとする取り組みである。

3 薪の宅配サービスの意義

当社では各地に薪置き場を設置し、「薪の地産地消」を進めている。最終的には各市町村に拠点を作りたい。

薪の宅配サービスには、①森林資源の有効活用、林業振興・森林環境の保

薪の生産にはアルバイト主体で約100名が従事している。スタート時50軒ほどだった顧客数は年々増加し、2015年度には1518軒となり、薪の販売量は束数で19万1696束、層積で3834m³(高さ1mに積んで8.6km相当)、CO₂削減量は約1000tとなった。

4 薪ストーブの普及と薪需要

当社の薪販売のベースとなっているのは薪ストーブのお客様である。長さ別では45cmが圧倒的に多いが、最近小型ストーブの普及により30cm薪の需要が増えており、今後もこの傾向は続くと思われる。

薪ストーブの価格は本体、煙突、設置費用で100万円ほどである。伊那市近郊では新築住宅の20%に導入されている。おしゃれな暖房器具というイメージがあるが、やはり暖かい、というのが特徴である。

薪ストーブの普及についてはきちんとした統計が無いが、長野県のアンケート調査によると薪ストーブ使用率は約4・2%とされており、同県内で約3万台の薪ストーブが導入されていると推定される。

別のアンケート調査によると薪の調達手段は全量購入が23%、一部購入が19%、自己調達が55%となっており、薪の使用量も不明だが、ストーブ1台あたりの年間の薪使用量を本数で3千本、原木換算で6m³とすると、3万台×6m³で18万m³となる。このように統計には現れないが、長野県の素材生産量40万m³の半数近い需要が存在すると推定される。

今年家を建てた方は、来年は家を建てない。薪ストーブの場合、今年薪を使った方は来年も使うわけで、安定した需要だという強みがある。

5 「薪の広葉樹信仰」を打破

薪販売を始めた頃、お客様には「針葉樹の薪なんかタダでも要らない」と言われた。そこで、この宅配サービスではあえて針葉樹薪しか扱わず、まずは使っていたこととした。使ってみると針葉樹でも大丈夫だった、ということ、次第に定着してきている。これは売れるものではなく売りたいものを売り、間伐材をお金に変える仕組みである。

ストーブ用薪の基本は①樹種よりも乾燥②乾燥には、風通し、日当たり、温度が重要。特に風通し③身近な材料(針葉樹、剪定枝、製材端材)の活用、



露天の薪置き場

である。当社では露天で乾燥している。濡れてもそれ以上に乾燥するので屋根無しでも問題ない。

針葉樹の薪は、①ススが多くてすぐに煙突が詰まる②高温になってストーブが傷む③火持ちがしない、と言われるが、果たして本当だろうか。

①については、実際に針葉樹薪を1年以上使用した後に煙突を調べると、ススの重量は100gと少なかった。ススの多さは、針葉樹か広葉樹かの違いではなく、薪の乾燥具合と焚き方によって決まるものである。ススは低温での不完全燃焼によって発生するため、薪が湿っている場合、あるいは燃焼時の空気が十分でない場合に発生すると考えられる。

②、③を検証するために、同重量の針葉樹薪(カラマツ・アカマツ)と広葉樹薪(コナラ)を薪ストーブで燃やし、燃焼時間と発熱量の関係を調べたところ、カラマツ・アカマツの総発熱量はコナラより多く、発熱量のピークが高かったが、樹種による火持ちの差はあまり見られなかった。高温については薪の量と空気の量による調整が可能

であり、針葉樹薪が不適ということではない。同じ重量の薪であれば同じ熱量を発生させることから「薪はすべて同じ」と言えるが、重要なのは水分量と比重(密度)である。同じ体積の薪ならミズナラはカラマツ、アカマツより2〜3割重く、発熱量も多い。

針葉樹薪には使いやすい面もある。一つは、乾きが早いということである。針葉樹薪は夏季なら2カ月で、冬季なら6カ月で乾燥するが、広葉樹は乾きにくく、15カ月ほど乾燥に要する。もう一つは、焚き付けが容易だということである。

以上のように、針葉樹薪にはメリットも多く、身近な材料を活用できる点においても有用である。

6 薪需要の今後の展望

薪と灯油による発生熱量を比較すると、同じ重さでは灯油は薪の約2・8倍のエネルギーを持つ。しかし灯油価格が100円/ℓを超えると、薪の方が有利になってくる。

薪の需要は今後まだ伸びる可能性があり、将来性のあるおもしろい分野だと考えている。

講演2 「サテライト市場と業務用薪の供給について」

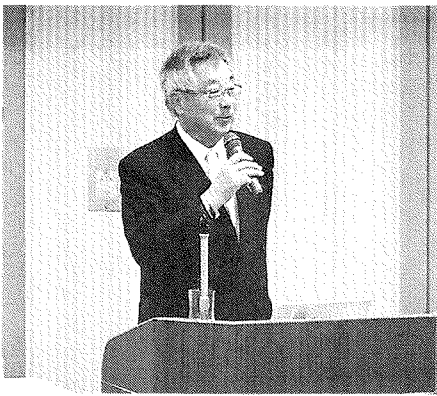
講師 (株)東海木材相互市場

代表取締役社長 鈴木 和雄 氏

1 (株)東海木材相互市場の概要

当社は昭和30年に創立し名古屋市中に本社を構え、西部市場(愛知県海部郡飛鳥村)・大口市場(愛知県丹羽郡大口町)の二つの市場とサテライト美並(岐阜県郡上市美並町)・サテライト名倉(愛知県北設楽郡設楽町)の二つのサテライト土場、及び飛騨匠工場(岐阜県高山市、プレカット製造)を運営している。

西部市場(平成元年開設)では国産製材品、建材、銘木、外材製材品を取扱うほか、プレカット工場を運営して



講演する鈴木和雄氏



素材のセリの様子(大口市場)

いる。大口市場(昭和46年開設)では素材、国産製材品、外材製材品を取扱うほか、プレカット工場・乾燥工場を運営している。

これらの市場は複式市場であり、市売問屋等により構成されている。素材は基本的にセリ売りとし、岐阜、愛知、長野、静岡からの入荷が多い。素材の取扱材積は平成2年の15万m³をピークに減少傾向となったが近年は横ばいで推移し、平成27年には13万m³(サテライト込)となっている。価格も下がっており、ヒノキでの下落傾向が顕著である。

乾燥事業は平成20年に開始した。当

時、日本の製材品のうち、柱材については乾燥材が主流になりつつあったが、一方で梁材等の平角は生材ばかりで、ベイマツに市場を奪われていた。そこで、お客様の製材工場で製材された国産材を当社で乾燥することとし、JAS認定も取得した。

2 サテライト土場を開設

平成18年頃から素材価格が急激に下落し、なんとかして流通コストを下げなければと考え、平成21年、サテライト土場を設けることとした。山元に近い場所に中間土場を作り、そこから大きなトラックで大量に運搬することで運搬コストが下がる。伐採業者にとっても、少量の丸太でも土場に持ち込むことが可能となった。この地域の特産物である木を売ることから、「木の駅」と呼んでいる。

当社ではサテライト土場に入荷された丸太を仕分けし、当社相場基準で買い取り、工場等に販売している。スギ・ヒノキの仕分け基準は次のとおり。① A材：製材用(並材で欠点がないもの) ② A材：製材用(若木、少々の色むら、軽微な曲がりがあるが柱・桁がと

れる程度) ③ B材：集材用材、④ 2 B材：合板用材、⑤ C材：チップ用材 ⑥ D材：バイオマス用材 ⑦ 別品材：セリにかけて高く売れそうな材(大口市場に出品)。サテライトとは、大口市場の衛星という意味である。

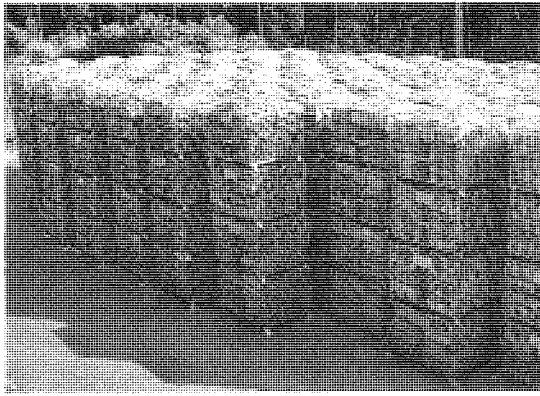
サテライト土場では、選別に機械を用いず、1本ずつ目で見て仕分けを行っている。良いものを高く売するためにはきちんと選別をすべきだと考えている。枝出材や黒芯材、腐朽材、曲がり等の状態を確認し、仕分け基準に基づいて仕分けしている。

A材・2 A材については、QRコードを木口に貼り付け、樹種・長さのほかに丸太がどこで伐採され、どのような経路をたどったのかを確認できるようにしている。産地証明制度の裏付けとなるほか、クレームがあった場合の対処にも役立っている。

3 業務用薪生産の取組み

薪の生産は、平成22年に開始した。出材の少ない時期の仕事として始めたのがきっかけである。

しかしストーブ用の薪は、名古屋近辺では12月〜2月の3カ月間しか売れ



メッシュパレットでの保管の状況

ない。そこでピザ屋さんとの連携により、通年での需要が見込まれる業務用薪を生産することとした。現在2カ所のサテライト土場において、クヌギとナラを主体とした広葉樹薪を生産している。

ピザ屋さんからの要望により、薪の長さは48cmとしている。ちょうど良い太さの原木はしいたけ原木に使われるので、かなり太いものを使うこともある。薪の保管には、積み重ねられるメッシュパレットを使用している。

薪は当初、結束バンドで束ねて出荷していたが、宅配業者からオガ粉が落ちるので箱詰めできないか、と言われ、



箱詰めされた業務用の薪

段ボール箱に詰めて出荷することにした。ところが今度は、4〜5月頃に虫がわくことが分かった。基本的に、広葉樹の皮付き丸太には必ず虫が入っている。販売先は飲食店のため薬剤での駆除は行えないことから、3月末〜6月頃、大口市場にある木材乾燥機での人工乾燥を行うこととした。コストはかかるが、品質保持のためには必要だと考えている。ただし、乾燥しすぎても良くないとのことで加減が必要である。

段ボール1箱は約30kgで、月に800ケースほど出荷している。困るのは正月とお盆休みである。基本は毎日出

荷であり、長期休暇の前には大量の薪を準備しておく必要がある。当初、手の空いた時の仕事として始めたのだが、そうはいかなくなった。

薪生産は毎日7時間、シルバースン2人×サテライト2カ所の4人で行っている。このうち2人については、7時間のうち5〜6時間が出荷のための作業となっている。

メッシュパレット1個に48cmの業務用薪が0・5m³入る。ナラ・クヌギ薪はパレット1個あたり1万7千円ほどで販売している。

また、各サテライトと大口市場に「薪あります」の看板を掲げ、一般家庭用の広葉樹ミックス薪も販売している。家庭用薪は土場まで取りに来てもらっている。

これまで、なんで?どうして?と問いながら課題を乗り越えてきた。今後地域の人を巻き込み、守ることに全力を尽くしていきたい。

4 名古屋城本丸御殿の復元工事

最後に、名古屋城本丸御殿の復元工事について紹介する。

名古屋城本丸御殿は1615年に建

てられた書院造りの木造建築で、昭和20年、戦災により天守閣とともに焼失したが、図面等が残されていたため、平成20年度から29年度の三期10年にわたり、伝統構法による復元工事が行われている。

伝統構法とは、柱や梁などの軸組で構成される木造軸組構法のひとつで、古来より日本建築で培われてきた、木と木を加工して組み合わせ、建物を造る構法である。

現在の一般的な在来構法では、壁には主に構造用合板と筋交いが用いられるが、伝統構法では柱と柱の間を水平の貫(ぬき)で繋ぎ、竹小舞を下地として土壁が用いられる。地震や風の揺れに対し、変形は大きいながらも粘り強く抵抗するのが特徴である。

当社は本丸御殿の復元工事にあたり、桧をはじめとする各種木材の調達を担っている。あらゆる所に貴重な木材が使われているほか、模写により復元された障壁画なども素晴らしい。本丸御殿の一部が公開されているので、名古屋にお越しの際はぜひご覧いただきたい。

(鈴木理事長講演は次号で紹介します)

トピックス

鈴木理事長が新潟県、山形県で講演

当組合鈴木理事長が新潟県、山形県で開催された講演会に招かれ、講師を務めたので紹介する。

◇森をはぐくむ地域づくり講演会

(2月3日、主催：下越流域森林・林業活性化センターほか)
会場：新潟県新潟市

演題：「日本林業の戦前戦後の動きと地域再生―すぐそばにある巨大産業―」

◇もがみ森林「創」産業推進大会

(2月14日、主催：山形県最上総合支庁ほか)
会場：山形県新庄市

演題：「原木産地をつなげ安定供給」

◇山形県木炭講演会

(2月17日、主催：山形県置賜総合支庁ほか)
会場：山形県西置賜郡飯豊町

演題：「薪ビジネス」は巨大産業になるのか？」

岩手県低コスト再造林促進協議会第2回総会・説明会開催される

平成28年7月に設立された岩手県低コスト再造林促進協議会の第2回総会が2月9日、盛岡市において開催され、当組合鈴木理事長が委員として出席した。

総会では事務局により検討が進められてきた低コスト再造林にかかる助成制度について協議が行われた。

この制度は、原木の出荷者、原木市場、加工工場等が原木取扱量に応じて拠出した協力を金で「岩手県森林再生機構(仮称)」が基金として積み立て、低コスト再造林を行う森林所有者に対し助成を行うもので、大分県、宮城県等で同様の取組みが実施されている。助成の枠組みは次のとおり。

▽再造林への助成

1 助成対象

協力金の拠出された伐採地において、森林所有者等個人が行う再造林(国や県、市町村等が行う再造林は対象外)。

2 助成金額

森林所有者の自己負担額以内で、1ha当たり10万円を上限とする。

3 助成条件

(1) 次のいずれかにより造林している

森林所有者に対して助成する。

ア 伐採から造林までの一貫作業

イ 低密度植栽(ha当たり)

①カラマツ：2000本以下

②スギ・ヒノキ：2400本以下

③アカマツ：3200本以下

ウ コンテナ苗の植栽

(2) 当面の間、1人当たり年間5haの造林面積までを助成する。

▽協力金の拠出

1 協力金拠出対象材

岩手県内の国有林・公有林・私有林から出荷・流通された針葉樹材で、主伐材・間伐材ともに対象。

2 協力金額(m³当たり)

(1) 原木出荷者：20円

(2) 原木市場、原木流通業者：20円

(3) 原木購入者：10円

※ 原木購入者：製材工場、合板工場、集成材工場、チップ工場、木質バイオマス発電所(バイオマス材は1m³

を1tに読み替える)

* * *

同日、同協議会・県の主催による再造林促進対策に係る説明会が開催され、合板工場、製材工場、バイオマス発電所、素材生産業者等の関係者約30名が出席した。

説明会では、再造林が進まない現状と森林所有者負担軽減の必要性、助成制度の仕組みについて事務局から説明があった。

なお、協力金の拠出は平成29年度から、助成金の交付は30年度から開始される予定である。

当組合では持続的な森林経営の実現を目指し、平成20年度から低コスト再造林の実証等の取組みを行ってきており、一般の助成制度においては、原木流通の立場での協力が求められている。

素材生産業者は原木出荷者に位置付けられるため、1m³当たり20円を拠出することとなる。組合員の皆様にも特段のご理解とご協力をお願い致します。

復興庁務台復興大臣 政務官が来訪

復興庁の務台俊介復興大臣政務官が2月13日、当組合に来訪され、被災地の森林経営等に関する意見交換が行われた。

当組合から共同販売による国産材安定供給や後継者育成等の取組みと震災等の復旧支援活動等について説明し、務台政務官からは、安定供給の取組みは素晴らしいビジネスモデルであり、林業振興が被災地復興のエンジンとなっている、とのコメントをいただいた。



和やかに意見交換が行われた

いわて林業アカデミー まもなく開講

岩手県は平成29年4月の「いわて林業アカデミー」開講を控え、最終的な準備を進めている。

2月9日に開催された第2回いわて林業アカデミーサポートチーム会議において、サポートチーム代表に岩手県森連の中崎代表理事長が、副代表に当組合鈴木理事長が選任された。当組合では組合員の協力を得て、研修をバックアップすることとしている。

また同14日に開催された第3回いわて林業アカデミー運営協議会では、平成29年度研修生の追加募集について事務局から説明があった。これまでに12名が合格しているが、定員枠に余裕があることから、最終募集として若干名の募集が行われ、当初30歳未満とされていた年齢要件が、今回概ね30歳未満に緩和されている。申請期間は2月15日～3月23日で、選考は3月29日に行われる。

ナラ枯れ被害対策セミナー 開催される

北上川中流域森林・林業活性化センター主催のナラ枯れ被害対策セミナーが2月16日、平泉町において開催され、関係者約120名が出席した。

岩手県によると、県内のナラ枯れ被害は平成22年度に県南地域で初めて発生し、25年度以降急増。特に沿岸南部から海岸伝いに被害が北上しており、28年度には宮古市まで到達している。また秋田県側からも被害が拡大してきている。

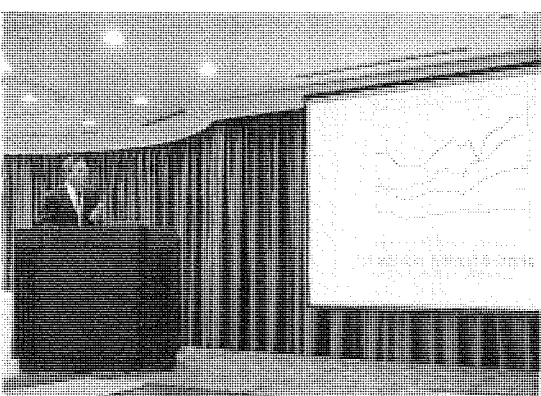
県では被害監視と被害木燻蒸等の駆除処理、原因となるカシノナガキクイムシの誘引捕殺等の対策を徹底するほか、新たに「ナラ枯れ被害対策実施方針」及び「ナラ枯れ被害材等の移動に関するガイドライン」の策定を行い、29年4月から運用することとしている。

セミナーでは被害の実態とおとり木・おとり丸太を用いた誘引捕殺法等について報告があった。

原木運搬にかかる情報 共有化の取組みを報告

原木安定供給シンポジウム(主催・日本木材総合情報センターほか)が2月21日、東京都千代田区において開催され、全国の関係者約80名が出席した。

原木の安定供給をテーマに林野庁宮澤木材産業課長による基調講演、4つの事例報告とパネルディスカッションが行われ、東北地区広域原木流通協議会の原木運搬の情報共有化の取組みについて、当組合外館経営企画部長が報告した。



原木運搬の情報共有化について報告

原木運搬にかかる情報共有化会議を開催

東北地区広域原木流通協議会（会長・NJ素流協鈴木理事長）は、原木運搬にかかる情報共有化会議を2月22日、盛岡市において開催し、岩手県内の国有林、素材生産、木材流通、運送、加工工場等の関係者30名が出席した。

会議では原木運搬の現状と課題、要望事項について各出席者から報告され、課題の整理と討議が行われた。

管内供給先情報

1. (株)ウッティかわいバイオマス発電所が24円材の受入れを開始。
2. (株)山大が乾燥機増設へ。
3. 秋田プライウッド(株)第2工場再開へ。
4. スギ10~13cm、14~16cmは、分別すれば納材可能。お問い合わせは当組合へ。

主な課題等は次のとおり。
・運賃単価が安い。林業界全体の課題として考えるべき。

・ドライバーの拘束時間短縮のため、検知作業の効率化が必要。

・トラック購入の補助対象に運送業者も認めるよう、補助制度の拡充を要望。

・運送業者のネットワークを作り山元から効率的に搬出できないか。

・国有林の林道・土場を大型トラック対応とするよう要望。

・国有林の中間土場の設置を要望。
・国有林のシステム販売、山元委託販売の早期販売を要望。

原木トラック協議会 設立準備会を開催

東北地区広域原木流通協議会は、情報共有化会議に続いて「東北地区原木トラック協議会（仮称）」の設立準備会を開催し、運送業者8名、事務局9名が出席した。

これは原木運搬にかかる様々な課題の解決に向け業界が一丸となって取り組むため、東北地区（福島県以外）

の原木運搬関係者による協議会の設立を目指すものである。

設立準備会の会長には(有)三栄興業の松田社長が、副会長には(株)古里木材物流の畠山社長が選任され、NJ素流協が事務局となり平成29年度の協議会設立に向けて準備を進めることとなった。今後関係者に参加を呼びかけていく。

全素協理事会に出席

全国素材生産業協同組合連合会（全素協）の理事会が2月23日、東京都千代田区において開催された。当組合から鈴木理事長、高橋常務理事が出席し、平成29年度事業計画等にかかる協議が行われた。

合法木材等研修に出席

合法木材供給及び発電用木質バイオマス証明にかかる認定団体の研修会が2月27日、東京都江東区において開催され、当組合職員2名が出席した。

研修では、本年5月に施行されるクリーンウッド法の関連省令（パブ

リックコメント実施中）の内容が示された。これによると、木材・木材製品の流通、加工や建築等に携わる「木材関連事業者」が「登録木材関連事業者」を名乗るためには、合法性の確認方法等を定め登録実施機関の認定を受ける必要があるが、森林認証制度や従来の林野庁ガイドラインに基づく合法性証明制度も、合法性の確認に活用できることとされている。

H27木質バイオマス エネルギー利用量確報

林野庁が1月31日に公表した木質バイオマスエネルギー利用動向調査確報によると、平成27年にエネルギー利用された木質バイオマスは、木材チップが690万絶乾トン、木質ペレットが16万トン、薪が5万トン、木粉（おが粉）が37万トンで、木材チップのうち間伐材・林地残材等に由来するものは117万絶乾トンだった。木材自給率は33.2%に修正された。木質バイオマス利用発電機は232基、ボイラーは1945基だった。

ちよつと気になる木の話 8

希少な針葉樹の用途を考える

—スギ・ヒノキ・アカマツ—

カラマツ以外の用途は?—

針葉樹が建築用材として主に使われるが、スギ・ヒノキ・アカマツ・カラマツ以外の樹種は、時々出材される。高標高の場所に点在するため、その現在の用途については、あまり知る機会がない。そこで、今回現状を分析してみよう。

まずは、モミである。モミは、かつて棺桶の材料として大量に使用されていた。土葬が主流だった時代、白系で腐り易く、大径材であるモミは最も適した材料であった。欧州においてモミの板をわざわざ日本が買うので用途を日本人に聞いたら棺桶の材料と言ひ、こんな日本で作ればいいのにと言われていた。モミにこだわり、ヨーロッパモミに向かった日本人のこだわりであろう。今は棺桶は中国からほぼ100%輸入されており、国産材化の最大のターゲットとして考えられる。また、神社やお寺の塔婆、お札や絵馬、カマボコの板なども本来

の用途である。こうしたモミ製材品業者は、いわき、高知、宮崎等に現存する。北海道のトドマツはTodes(モミ属)なので、こちらに使えばと考えるのだが・・・。ちなみにモミは本モミと呼ばれるが、ウラジロモミはそれに比較すれば、単価は安くなる。

次に、サワラである。サワラは、現在でも用途がはつきりしており、その専門業者は木曾、中京地区に集中して、最近更に価格が高騰している。超優良木は、コケラぶきと言われる文化財に多い屋根ぶき材料である。コケラぶきの職人が限られるため、文化財修復は順番待ちである。善光寺の山門も、一時松皮ぶきだったが、コケラぶきに回帰している。手割りなので、アメリカで言えばウッドシェイクである。次は、すし桶などの桶類である。水に強いことが必須であるが、松ではご飯に匂いがつくため、サワラが最適である。最近海外でのスシブームもあり、海外輸出が盛んになりつつある。海外でも本物志向である。また、風呂屋で宣伝用につくられたプラスチック製のケロリン桶に代わるサワ

ラ桶が、中高年のお土産として販売されている。値段は、予想よりはるかに高い。

次は、コウヤマキである。コウヤマキは、風呂の材料としての最高級品であるが、コウヤマキの出材は極めて稀である。コウヤマキのコウヤは高野山のコウヤであるが、高野山のある和歌山での出材もほとんど無い。最近では、長良川の鵜飼舟がコウヤマキ指定であり、どうしても必要な材料である。

更には、ネズコである。ネズコは中部山岳地帯にあるが、主たる用途は天井材、建具材、指物である。へぎ板という薄い板にして網代(あじろ)天井をつくる業者も現存する。建具材としては、金沢市を中心とする北陸で人気がある。実は、高級材として輸入されるベイスギはスギではなく、ネズコである。ちなみにベイスギには、有名なヒノキチオールが含まれる。ヒノキチオールは、ヒノキには存在せず、台湾ヒノキ、ベイスギ、ヒバに含まれている。

その他にも、イチイの木は良く銘木市でみかけられる。イチイは、北海道ではオンコと呼ばれるが、漢字で一位

とあるように、神官さんの手に持つ笏(しゃく)の材料である。高山では、有名な一刀彫として、特産品にもなっている。床の間の材料としても希少で、いくら細くても、曲がっていても価格はつくので、トラックの一番上に玉切りせずに乗つけて運ぶのが基本である。

最後に、結構存在するのが、ドイツトウヒである。鉄道の防風林にも大量に植えられている。JR東日本では、このトウヒを駅ナカの喫茶店の内装に使っているようだが、CSRの一端かなと思う。しかし、エゾマツもマツでなくトウヒであること、北欧材のホワイトウッドであるヨーロッパトウヒが管柱市場の一定のシェアを獲得していることからすれば、ドイツトウヒも国内メーカーが利用することに問題はないと考える。

外来樹種であるストローブマツも、輪生節なので節の間は完全無節である。フィンガージョイントすれば無節板である。

このように、その他N(針葉樹)と言われるものも大切な資源である。出材したときは、しばし考える時間が必要である。

今月の名木・巨木

38

(岩手県九戸郡洋野町)

岡谷稲荷神社の

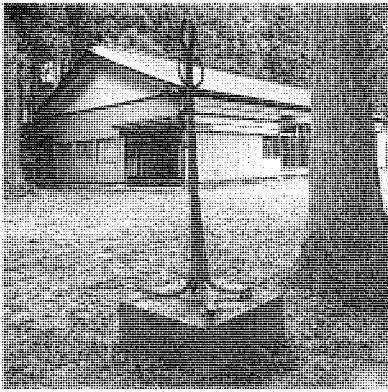
ハリギリ

所在：洋野町種市6-144

岩手県沿岸の北端に位置する洋野町種市はウニやホヤの産地として知られ、海のイメージが強いが良質のアカマツ材産地でもある。

東日本大震災の大津波では一部の居住地や漁港が被災したが、防潮堤と住民の日頃の備えにより犠牲者は一人も出なかったという。

宿戸地区から西側に2kmほどの場所にある岡谷稲荷神社は、古い歴史を持つ三陸有数の神社である。海の安全・豊漁を祈願してか、境



奉納された礎



赤いほっかむりをした狐達が出迎える

日曜日には例大祭が行われ、多くの参拝者が訪れるという。

社殿の横にそびえ立つハリギリ

は、樹高、幹周等のデータは不明だが、全国でもトップクラスの巨木と思われる。天然記念物等に指定されていないのが残念である。

ハリギリは、ウコギ科ハリギリ属の広葉樹で、日本、南千島、サハリン、中国、朝鮮半島等に分布する。センノキ、センとも呼ばれ、木材としてはこちらの呼び名が一般的である。名前のとおり若い幹

や枝にトゲがあり、材色は白く、キリに似ていると言われる。

日本でのセンの主産地は北海道で、材色や木目の美しさなどから内装用の天然木化粧合板に多く使

われている。材が硬く強度があるものはオニセン、材が柔らかく加工し易いものはヌカセンと呼ばれ、建築用材、家具材、彫刻用材など

多くの用途に使われている。

林業事業体「安全診断」を受けてみませんか？

全国素材生産業協同組合連合会(全素協)では、林野庁事業「林業労働安全推進対策」による安全診断を実施しています。

これは、労働安全コンサルタントの資格を有する専門家が林業事業体を訪問し、事業所の安全診断を実施するもので、診断の費用は無料です。

ただし、林業事業体が対象とされているため、運送業については対象外とのことです。

安全診断の実施を希望する場合は、事業実施主体の全素協に申込が必要です。申込用紙は当組合にもございますので、お気軽にお問い合わせ下さい。

3月1日～5月31日は 山火事防止運動月間です

空気が乾燥しています！
火の取り扱いには

十分注意を！

平成 29 年 2 月 分 の 販 売 実 績

樹 種	合板用			その他 製材用等			計		
	当月出荷量 (m ³)	前月比 (%)	前年同月比 (%)	当月出荷量 (m ³)	前月比 (%)	前年同月比 (%)	当月出荷量 (m ³)	前月比 (%)	前年同月比 (%)
スギ	12,847	130.1	173.7	7,333	79.1	113.6	20,181	105.4	145.7
カラマツ	2,443	99.7	87.0	160	139.0	4.5	2,604	101.5	40.8
アカマツ	3,866	123.8	132.0	323	106.4	84.1	4,190	122.3	126.4
その他針葉樹	0	*	*	0	*	*	0	*	*
広葉樹	0	*	*	8	*	*	8	*	*
合 計	19,157	124.0	145.8	7,825	80.7	75.2	26,982	107.3	114.6

樹 種	バイオマス用素材		
	当月出荷量 (t)	前月比 (%)	前年同月比 (%)
スギ	3,704	91.9	297.9
カラマツ	686	97.7	147.3
アカマツ	2,356	116.1	146.9
合 計	6,746	99.8	203.6

樹 種	今年度累計			
	合板用 (m ³)	その他 製材用等 (m ³)	計 (m ³)	バイオマス (t)
スギ	98,427	77,631	176,058	50,304
カラマツ	26,535	8,416	34,951	15,005
アカマツ	27,687	2,065	29,752	16,435
その他針葉樹	0	1,178	1,178	0
広葉樹	0	1,398	1,398	0
合 計	152,649	90,688	243,337	81,744
目標達成率(%)	84.8	90.7	86.9	90.8
計 画 量	180,000	100,000	280,000	90,000

注) *印は前月又は前年同月実績がなかったことを示す。

【平成 29 年 2 月 の 需 給 動 向】

- スギは製材用も合板用も製品の動きは順調のため、原木の引き合いが強い。
- カラマツは特に含水率が低く、原木が凍らないため合板用の引き合いが強まった。
- アカマツは出材が順調のため、供給過多の状況となっている。

耳からウロコ

駅名と木材流通

旧国鉄の駅には、誤解が生じないよう同じ駅名はつけられていない。後で出来た線に存する駅には、冠単語をつけるのが基本である。

秋田の湯沢より後に出来たので、有名な越後湯沢には越後がつく。山形の左沢線には、羽前金沢、羽前長崎、羽前高松と県庁所在地名が3つも並んでいるのは有名である(岩手には県境を越えて、陸前高田駅が、秋田にも陸中大里駅がある)。

さて、本題である。この冠単語が県内で一緒の県と異なる県が存在する。県産材振興が各県とも謳い言葉となっているが、ちよつとスムーズに行かないなど思えるところもある。県内駅名の冠言葉が異なる県を見てみよう。

- ・青森↓陸奥○○、津軽○○
- ・福島↓磐城○○、安積○○、会津○○
- ・長野↓信濃○○、伊那○○、木曾○○

- ・福井↓越前○○、若狭○○
- ・岐阜↓飛騨○○、美濃○○

このように沢山ある。意外にも九州や四国にはほとんど存在しない。各県の成り立ちに起因して、駅名をつけるときに、配慮したのか、わかり易くしたのか、要望だったのかは私にはわからない。もちろん、元々の藩が異なるので気候風土が異なり、樹種や木材品種の特徴に差があることも一因といえる。木材の流通が地元の狭いエリアから少しずつ拡大していく中では、重要な因子となっている。県境はあるものの、道路網の整備により、明らかに他県の方が近いエリアが存在することとなる。代表的な木材市場でも、近県材の流入が長年続いていたのも事実である。

しかしながら、県内流通がスムーズにいかないのには、立っている木の樹種や性質ではなく、距離でもないアイデンティティが関わっているのかもしれない。時刻表を見ながら、木材流通が上手くいく方法を考えるのも一考かと思うが：。こんなこと考える人は誰もいないのかもしれないが：。